

「改善を重ね、手を抜かず、丁寧に」

労働者委員 下町 和三

7月中頃、鹿児島市から枕崎市へ行った。

50才代も半ばになると、車の長距離運転はきつい。最近の燃料費値上がりもあって、それならばと、路線バスで枕崎へ。鹿児島中央駅を12時38分に出発、バスは鹿児島市街地から川辺峠を越えて、山あいから南下すると成長初期の普通期水稻地帯から稲穂が垂れ始めた早期米地帯へ、7月終わりから8月初めには収穫される。

一般的にコメ作りは1年に1作しかできない、30年経験しても30作、まして気象条件は毎年異なる。水路の手入れ、土作りから育苗、水管理、台風や病気、虫、草への対策と気を抜く間はない。1年1作の重さを感じる。

機械化が進んだとはいえ、作業はやはりきついと思う。夜明けとともに田に行き、日中の暑さを避けて、また作業に出る。そんな農家が多いのではないか。

収穫を直前にしてウンカで壊滅的な被害、ということもある。収穫した米の販売と経営もある。他の農作物も同じだと思うが、これをきついとみるか、創造的なやりがいとみるかで評価は分かれる。

しかしそれは、何においても同じ事がいえる。手抜きをすればそれだけのものにしかない。様々な知識と知恵と技術を投入して、改善を重ね、手を抜かず、丁寧に取り組む。その事は日本のものづくりから流通、サービス業にいたるまで共通する。

14時過ぎ、枕崎駅に着いた。約1時間半の旅である。座っていれば目的地へ運んでくれる、景色を眺め、読み物も、こんなありがたいことはない。運転席真後の席からは、運転手さんの安全運転への気遣いがよくわかる。土曜日の午後、乗客は、最多で席数の半分を超えただろうか。経営的にはどうか。一方では、バスやトラック、タクシーの運転手不足がいられている。日常的にこの路線を利用している方もあるはずだ。公共サービスのひとつ、公共交通機関の確保と負担はこの国の重要な課題のひとつである。

枕崎駅には「本土最南端の始発・終着駅」の碑がある。JRも私鉄バスもここからとここまで。陸路では終着だが、眼前には東シナ海・太平洋が広がる。枕崎といえば「鰹（かつお）」。食堂のメニューに「鰹の刺身」と「ぶえん鰹」がある。違うのだと、経験に知恵と技術が加わる。「鰹のビンタ」に「鰹の腹皮」などなど。店内はほぼ満席、活気がある。

地方は超少子高齢化、都市への一極集中は止まらず、将来は消滅する自治体もあるともいわれる。しかし、近年、町おこしも盛んである。地元の産物や特性を活かした産業起こしで、若者が地元で生活し、人も呼び込む。

知識と知恵と技術を合わせ「不利」を「利」に変える。改善を重ね、手を抜かず、丁寧に取り組む。これが一番。さて、己は、反省、反省。